

「まえばし未来アトリエ」における学びの成果と課題

—アーツ前橋・群馬大学連携による人材育成事業の意義—

春原史寛・茂木一司・手塚千尋・木村祐子
小田久美子・宮川紗織・茂木克浩・高木露子

群馬大学教育実践研究 別刷

第34号 63～76頁 2017

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

「まえばし未来アトリエ」における学びの成果と課題 —アーツ前橋・群馬大学連携による人材育成事業の意義—

*春原史寛・*茂木一司・**手塚千尋・***木村祐子
****小田久美子・*宮川紗織・*****茂木克浩・*****高木路子

*群馬大学教育学部・**東京福祉大学短期大学部・***前橋市地域包括支援センター永明
****アーツ前橋・*****群馬大学大学院

Achievements and Challenges in “Maebashi Future Atelier” —Significances of Human Resource Development Project of Collaboration between Arts Maebashi and Gunma University—

*Fumihito SUNOHARA, *Kazuji MOGI, **Chihiro TETSUKA, ***Yuko KIMURA,
****Kumiko ODA, *Saori MIYAKAWA, *****Katsuhito MOGI, *****Fukiko TAKAGI

*Faculty of Education, Gunma University, **Tokyo University of Social Welfare,
***Maebashi City Regional Comprehensive Support Center,
****Arts Maebashi, *****Joint Graduate School of Gunma University

(2016年10月31日受理)

1. はじめに

本稿は、2016年度に文化庁の助成を得て、群馬大学とアーツ前橋(前橋市)が連携事業として実施したアートマネジメント人材育成事業「まえばしアートスクール計画」(代表:茂木一司)の一環を成す、実践講座Cコース「まえばし未来アトリエ」における講座受講生の学びについてその実相を確認し、受講生や講師らのふりかえりを報告することで、大学と美術館の協同によって地域のためのアートに関する人材育成を行った本プロジェクトの成果と課題を考察するものである。そのために、まず本事業の趣旨と目的を確認した上で、活動の概要、そして講座のデザイン意図と評価方法について述べる。さらに、受講者、講師、美術館職員、記録担当者、事務局担当者という多角的な視点からのふりかえりを掲載する。

なお、本事業は2017年2月まで実施される予定であり、ここでは2016年10月までの実践等について扱う。

したがって、中間まとめとしての位置づけとなる。さらに、講座の詳細な内容、展示やワークショップ等の個別の主要な活動については、別稿を準備する予定もある。

また、本稿では各項目を末尾に記名の執筆者が執筆し、全体を春原がまとめた。(春原)

2. 本事業の趣旨と目的

2-1. 連携事業「まえばしアートスクール計画」

本年度、群馬大学は文化庁の支援のもとでアーツ前橋(前橋市)と連携し、アートを活用して、インクルーシブなマインドを持ち、地域の中で「ひと」と「ひと」や「ひと」と「もの」をつなぐことのできる、ひろい意味でのアートマネジメントができる人材育成事業を実施している。そのために街全体をアートの学びができる場(スクール)にしたいという思いを具現化したのが、「まえばしアートスクール計画」である。

筆者は本計画の『プログラムガイド』に本計画の実施の契機を下記のように記して呼びかけた。

「社会に生きづらさが蔓延し、同時に生活感が失われ、わたしたちは箱（世界）の中で風船のようにふわふわと漂いながら、ぎゅうぎゅうと押しつぶされて生きています。狭いのでぶつからざるを得ないにもかかわらず、互いに自己主張ばかりしている。この状態は心地よいわけがありません。どうしたらもっと生きやすい社会を実現することができるのでしょうか？ ひとつは自分たちがつくってきた狭い枠を再考し、どうしても一緒にいなければならない仲間たちと少し自由について考えてみることです。

そのためには、もう一度他者との対話が必要です。わたしたちは多くの違和感を抱きながらも、「他者理解と合意形成」を繰り返して、自分たちにあった社会の形をつくり続けなければならないのです。今、必要なのは「協同的な学び」を通して、対話し、摩擦や葛藤を経験し、たくさん失敗をすること。つまり、大きなワークショップの学校＝アートスクール計画のような場が必要だということです。

ここでいうアートはけっしてむずかしいものではありません。わたしたちが日常生活の中で普通におこなっているあらゆることと関連する、いわば「生の身体技法」です。

表現とコミュニケーション（＝アート）なしに人は生きてはいけません。アートには多様性を受容する力によって、決定的に他者を否定しないよさがあります。他者との違いを感じたとしても、アートによって問題解決を図るのなら、その違和感を持ち続ける地平にむしろ新しい創造の世界が広がります。「わかり合えない」（平田オリザ）ことをわかりながら、それでも続けている学びがいま最も必要だと思うのです。」

群馬大学（茂木一司ほか）はアーツ前橋の基本構想の立案から関わり、特にプレ事業として実施してきたアートスクール事業を支援し、アートを市民にひらき、市民参加を核に地域文化をリードする役割を果たしてきた。地域アートプロジェクトには地域と人やものをアートでつなぐコーディネータとファシリテータの育成が不可欠であり、本事業はその育成プログラムを企画・実施・評価できる人材育成を目的としている。アーツ前橋はその名のごとく美術だけでなく、音楽・ダンス・演劇のほか、人の生活そのものをアートとして捉え、衣食住に関わる地域アートプロジェクトを実践している。さらに近年重要性を増しているインクルーシブな社会へアートが貢献できることも踏まえて、本企画は地域資源を核にさまざまなアートプロジェクトの実践を通して学び、企画・運営できる人材の育成とそのプロジェクトを受容できる学生・市民・学校教員の文化力の向上と参加へのマインドの形成を目的とし

た。

さて、本事業の総合ディレクターは筆者（茂木一司）が務め、基礎理論講座、集中講座、そして具体的な地域アートプロジェクト4つ（A・B・C・Dコース）に関わる実践講座を設定し、そこに多数の受講生と講師が関与することになった。

基礎理論講座は、広義のアートマネジメントをさまざまな視点から俯瞰できる講座として開講し、市民への開放講座として、市民がアートに興味を持てるように配慮し、前橋をインクルーシブでサステイナブルなコミュニティに再生するために、アートによって人・もの・ことをつなぐことのできる人材育成を目的とした連続講座として実施した。ところでアートプロジェクトでは、最終的な成果としての作品ではなく、制作プロセスの中で起こる出来事の豊かさを評価することが重要で、記録と参加者のリフレクション、編集作業を通じた報告書作成などが総合評価として行われる。そこで集中講座ではプロジェクトの意味や価値の記録にかかわる知識・技術・態度などを講義・ワークショップ形式で体験できるようにした。（茂木一司）

2-2. 実践講座Cコース「まえばし未来アトリエ」

さて、本稿で述べる実践講座Cコースは「まえばし未来アトリエ：インクルーシブ美術教育による社会実験：広瀬川美術館からの発信！」と題し、子ども絵画教室「ラボンヌ」¹⁾と大人向けの「生活造型実験室」によって、戦後まもなくから地域の美術教育の拠点であった広瀬川美術館（画家・近藤嘉男氏旧アトリエ）を活動拠点として、その理念を新たに「まえばし未来アトリエ」として再生する。かつて地域の美術教育を中心的に支えたラボンヌであるが、今日、広瀬川美術館は必ずしも市民に身近な場となっているとはいえない。それでもアートは決して一部の愛好家のためのものではない。市民のアートにかかわる豊かな記憶が残るこの場を再生し、社会的課題をアートによるソーシャルインクルージョンで解決していきたいのである。

そのためにこのまえばし未来アトリエでは、①子どもワークショップ ②展覧会づくり ③インクルーシブ・アート・カフェ（kinäii/きない） ④まえばしアートスクール計画研究会の4つの事業で、前橋の子どもたちが夢を持って実現できる力を養う未来型の学びの場を作ることを目的とした。

講師は、茂木・春原・手塚・木村の4名で、ワークショップ、展示・シンポジウム、研究会に際しては特別講師を招聘した。登録した受講生は22名で、学生から社会人、高齢者まで、分野も美術教育、福祉ほか多様な人材が集まっている。(茂木一司)

3. 実践の記録と活動の概要

3-1. 実践の記録

■ 5月22日(日) アーツ前橋スタジオ
実践講座①：Cコース全体ガイダンス、他己紹介ワークショップ

講師：茂木一司・春原史寛・手塚千尋・木村祐子

参加者：スタッフ7人、受講生15人

※ペアの相手にインタビューし、相手を紹介するオブジェを制作して発表するワークショップを実施した。

■ 6月5日(日) 広瀬川美術館
実践講座②：「まえばし未来アトリエ」オープニングパーティ準備、大学院生考案ワークショップ

講師：茂木・春原・手塚・木村

参加者：スタッフ3人、受講生15人

※パーティに来場者を巻き込む工夫やワークショップを検討した。

■ 6月11日(土) 広瀬川美術館
臨時講座：オープニングパーティ事前準備
講師：茂木・春原・木村
参加者：スタッフ4人、受講生14人



図1 オープニングパーティ実践

■ 6月12日(日) 広瀬川美術館
実践講座③：オープニングパーティ実践
講師：山崎法子(群馬大学教育学部音楽教育講座)・富岡恵美(群馬県立渋川特別支援学校)・茂木・春原・手塚・木村

参加者：スタッフ7人、受講生20人、一般38人

紹介記事：『上毛新聞』2016年6月14日20面

■ 7月10日(日) 広瀬川美術館
実践講座④：「わたしのアートエデュケーション展」をつくる

講師：春原・手塚・木村

参加者：スタッフ4人、受講生9人

■ 7月13日(水) 前橋市中央公民館
第1回研究会：特別レクチャー「アウトサイダーアートについて」榎野展正(クシノテラス主宰)

参加者：スタッフ5人、受講生9人、一般8人

■ 7月17日(日) 広瀬川美術館
臨時講座：「わたしのアートエデュケーション展」をつくる

講師：春原・手塚・木村

参加者：スタッフ4人、受講生3人

■ 7月24日(日) 広瀬川美術館
実践講座⑤：展覧会展示作業
講師：春原・手塚・木村
参加者：スタッフ3人、受講生11人

■ 7月26日(火)
～8月7日(日)：
展覧会「わたしのアートエデュケーション展」(広瀬川美術館)
来場者：108人
紹介記事：『上毛新聞』2016年7月27日18面

図2 「わたしのアートエデュケーション展」チラシ



■ 7月31日（日）広瀬川美術館

展覧会関連シンポジウム「ラボンヌと生活造型実験室」

染谷滋（元富岡市立美術博物館館長）・茂木・春原

参加者：スタッフ7人、受講生9人、一般7人

紹介記事：『上毛新聞』2016年8月1日18面

■ 8月7日（日）広瀬川美術館

臨時講座：展覧会撤収作業

講師：春原・手塚・木村

参加者：スタッフ3人、受講生5人

■ 8月11日（木）アーツ前橋スタジオ

第2回研究会：特別レクチャー「認知症の方に対話による鑑賞がなぜ良いのか」林容子（一般社団法人アーツアライブ）

参加者：スタッフ5人、受講生1人、一般10人

■ 8月21日（日）広瀬川美術館

実践講座⑥：「とがび展」・カオスギャラリー・カオステーブル実施について

講師：住中浩史（アーティスト）・春原・手塚・木村

参加者：スタッフ4人、受講生9人



図3 実践講座⑥

■ 9月10日（土）群馬大学教育学部

臨時講座：「とがび展」展示物作成・準備作業

講師：春原

参加者：スタッフ3人、受講生8人

■ 9月11日（日）広瀬川美術館

実践講座⑦：展覧会展示作業

講師：小林稜治（Nプロジェクト）・春原・手塚・木村

参加者：スタッフ6人、受講生10人、一般2人



図4 カオス
ギャラリー

※太田市立南中学校美術部生徒2名による「カオスギャラリー」制作を実施した。

■ 9月13日（火）～25日（日）：展覧会「とがび展@まえばし未来アトリエ」（広瀬川美術館）

来場者：130人

紹介記事：『上毛新聞』2016年9月15日14面

※会期中には受講生による「カオステーブル」の実践（実施者と来場者の交流を目指した講座・イベント等）を行った：自由な書道、おみくじ、ナノブロック組み立て、サックス・オーボエの練習、ハンドマッサージ、絵手紙等。

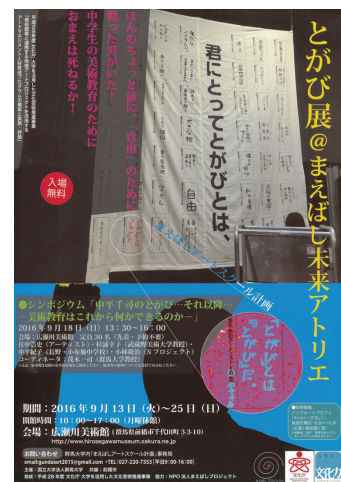


図5 「とがび展」
チラシ

■ 9月18日（日）広瀬川美術館

展覧会関連シンポジウム「中平千尋のとがび…それ以降…美術教育はこれから何ができるのか」中平紀子（小布施中学校）・小林稜治（Nプロジェクト）・住中浩史（アーティスト）・杉浦幸子（武蔵野美術大学）・茂木
参加者：スタッフ14人、受講生8人、一般21人



図6 「とがび展」シンポジウム

■ 9月19日（月）アーツ前橋スタジオ

第3回研究会：特別レクチャー「きのくに子どもの村学園—ニール式フリースクール」堀真一郎（きのくに子どもの村学園）

参加者：スタッフ5人、受講生3人、一般14人

■ 9月25日（日）広瀬川美術館

臨時講座：展示撤収作業

講師：春原・手塚・木村

参加者：スタッフ3人、受講生3人、一般1人

■ 10月9日（日）広瀬川美術館

実践講座⑧：中間まとめと「まえばし未来アトリエの学び展」に向けて

講師：春原・手塚・木村

参加者：スタッフ4人、受講生6人、一般1人

■ 10月22日（土）社会福祉法人清水の会デイサービスセンターえいめい

実践講座⑨：高齢者施設でのワークショップ—手のダンス

講師：砂連尾理（ダンサー）・木村・茂木・春原・手塚

参加者：スタッフ8人、受講生8人、一般35人

■ 10月25日（日）アーツ前橋スタジオ

第4回研究会：「群馬県立盲学校における美術教育の取り組み」多胡宏（群馬県立盲学校）、「アーツ前橋のアウトリーチプログラム」小田久美子（アーツ前橋）

参加者：スタッフ6人、受講生1人、一般6人

■ インクルーシブカフェ「Kinäii（きない）」

広瀬川美術館で定期的実施（運営は木村が担当）。カフェおよびワークショップ等を実施。

- ・ 7月24日（日）・31日（日）子ども向けワークショップ「すすめ！広瀬川たんけんたい！」：広瀬川の生物やコスチュームを作って広瀬川を散歩、見つけた植物などを集めてコスチュームに追加する。作品は「わたしのアートエデュケーション展」で展示。
- ・ 10月2日（日）・16日（日）・30日（日）ワークショップ「ひろせがわハッピーハロウィーン」（すいとんづくり）、10月14日（金）・28日（金）：「自叙伝づくり！」（古紙や手芸品で思い出を形にする）。



図7 すずめ！広瀬川たんけんたい！

■ 広報および情報共有

「Facebook」を活用した外部向けの活動の広報と、関係者向けの情報共有（非公開グループ）を行った。

（宮川・春原）

3-2. 活動の概要

本コースは、戦後早くから展示や子ども絵画教室を実践してきた前橋市の広瀬川美術館を活動拠点として新たな理念と方法で再生し、前橋市民が持つ同館の豊かなイメージを引き継いだ「まえばし未来アトリエ」事業として、インクルーシブなワークショップや展覧会活動を実施する。受講生はインクルーシブなアートワークショップや展覧会づくりなどを中心にアートマネジメントのマインドやスキルを学ぶことを目的とした（詳細な目的は本稿4-1で後述する）。

10月までの活動は大きく分けて、(A)「まえばし未来アトリエ」オープニングパーティの準備・実践に関わる講座（5月22日～6月12日）、(B) 展覧会「わた

しのアートエデュケーション展」の準備・実施に関わる講座（7月17日～8月7日）、(C)「とがび展」の準備・実施に関わる講座（8月21日～9月25日）、そして(D)研究会「まえばしアートスクール計画研究会」（7月13日、8月11日、9月19日）の4つである。また、広瀬川美術館を会場として定期的なインクルーシブカフェの実施も行った（木村が担当）。10月以降も12月にかけて、毎月1回のインクルーシブアート・ワークショップの実践と研究会の実施が予定されている。

(A)については、「まえばし未来アトリエ」の「オープニングパーティ」の実施を講座として設定し、ワークショップなどの方法によってさまざまな「もてなし」を検討・準備・実施することで、来訪者に自分たちの活動をどのように伝えるべきか、企画にどのように来場者を巻き込むための方法、また地域や関係者と連携をとる方法について、さらに展覧会事業に欠かせないレセプション等の意義と実施方法について、実践的に学ぶことができた。具体的には、かつて広瀬川美術館で行われていた子ども絵画教室「ラボンヌ」の講師・卒業生への受講生によるインタビューによって、地域における美術教育の記憶や記録を掘り起こし、映像やパネル形式でパーティ来場者に提示したこと、パーティでは美術と音楽の協同を企図し、事前に受講生内で音楽に合わせた絵画共同制作ワークショップ（詳細は本稿3-3で詳述する）を行い、パーティでは受講生が考案したプログラムによる音楽家（山崎法子氏、富岡恵美氏）の演奏にあわせ、その記録画像を放映したことが特筆される。パーティは群馬大学長、同教育学部長、前橋市長ほか多くの来賓を迎え、「ラボンヌ」関係者の思い出を聞くプログラムもあり、盛況であった。

(B)については、広義（学校内と学校外、フォーマルとインフォーマル）の美術教育に注目し、まず講座におけるレクチャー、ワークショップや討論を通じて、自身の経験してきた学校内での美術教育をふりかえり、現在自身が学校外で行っているアートに関連する活動との関係性を確認した。受講生が学校内の美術教育で制作された作品と、学校外で自身を形成してきた活動に関する作品などとそれらにまつわる記憶を集め、その学校内外の両者が現在の自己を通してどのように結びついているのか、学校の内側の美術教育と外側にあるアートの結びつきの可能性とはどのようなものか、ワークショップで考察し、これら記憶と考察を

パネルとして作品・物品とあわせて、また受講生による「ラボンヌ」調査の成果も加えて、展覧会として構成して来場者に提示した。受講生は、美術教育が包摂してきたものと包摂してこなかったもの、アートが包摂できるものに意識を向け、さらに自己についてのワークショップによる考察の方法、コミュニケーション・メディアとしての展示や展覧会の実施方法について実践的に学ぶことができた。



図8 「わたしのアートエデュケーション展」

(C)については、2004年から10年間にわたって長野県の公立中学校において美術教員・中平千尋氏（群馬大学大学院にも在籍）によって実施された、「中学校を美術館にしよう」を合い言葉としたアーティスト、美術館、卒業生、小中高校大学と連携した他に例のない「とがびアート・プロジェクト」の成果を紹介し、学校での中学生のための「自由」な「表現」としてのアートのちからに注目した。講座では「とがび」参加のアーティスト・住中浩史氏を迎えたレクチャーや、ワークショップにより、中学校も含む社会における自由とアートや教育の関係について、受講生が深く議論する機会となった。その成果を踏まえた展覧会では、「とがび」で実践された中学生のための自由な表現の場である「カオスギャラリー」が設置されて群馬県の中学生在制作を行い、住中氏考案の「カオステーブル」では、受講生が自由なテーマにより展覧会来場者とのかわりを持つ実践を行った。また、シンポジウムにおいて「とがび」がもたらした美術教育やアートの可能性について活発な議論・意見交換が行われた。以上のプロセスによって受講生は、(B)で自己の内側のアートを考察し、その成果の上で(C)において、他者のためのアートの可能性を検討することができた。



図9 「とがび展」展示作業

(D)については、前橋を中心とした地域のアートや教育、福祉などの関係者を集めた研究会を実施して意見交換や議論を行い、さらに特別講師によるアウトサイダーアートや高齢者、フリースクールなどアートにおけるインクルーシブな活動についてのレクチャーを実施した。レクチャーには受講生も参加し、多様な実践を学ぶことができた。

本コースには、美術教育・福祉に関わる学生や、学校教員、福祉施設職員ら異なる価値観を持つ多様な受講生が参加して多様な頻繁な活動を行うことで、インクルーシブアートにかかわる多様な価値観が議論され、提示される結果となっている。講座運営の特色として、ワークショップ的手法による「リフレクション」を重視し、受講生が経験をメタ認知できるように配慮している。なお10月以降の講座では、上記の前半期の成果をもとにして、子ども、障害者、高齢者（10月に実施）などを含むインクルーシブアートワークショップの実践と、その成果を紹介する展覧会の実践を予定している。（春原）

3-3. 音楽・美術ワークショップ「往復書簡」

6月5日のCコース講座では、オープニングパーティに向けて「音楽と美術の融合」をテーマにしたワークショップを実施した。パーティ内で行われるコンサートの1曲を受講生が鑑賞し、各自のイメージを集約し1枚の絵画として描きだした。ファシリテータは群馬大学大学院教育学研究科の大学院生3名（美術専修2名、音楽専修1名）が担当し、選曲や曲のイメージの考察は音楽専修の外所聖貴が、絵画での表現方法やワークショップの具体的実践方法については美術専

修の茂木克浩、高木路子が考案した。

曲目はドイツの作曲家であるシェーンベルクの初期の歌曲「作品2第1曲Erwartung『期待』」で、広瀬川にちなんで水に関係する曲を選んだ。この曲はモノトーンの曲調に「海の緑色をした池」「赤い屋敷」「三つのオパール指環」といった色彩感にあふれる歌詞のコントラストがみられる多彩な一曲である。また、彼はロシア出身の画家ヴァシリー・カンディンスキーと交流があり、シェーンベルクの音楽に感銘を受けたカンディンスキーが曲のイメージを描いた絵画《印象III（コンサート）》などが残されている。

ワークショップでは、音楽と美術の固有の枠を超え、お互いの表現活動から受けた刺激を自らの作品に反映させるという行為と、この2人の関係性に着目した。2人が文字や図形を用いて文通を行っていたという史実から「往復書簡」をキーワードに、相手から発信された表現を受け取り、それを解釈しつつそこに新たな表現を繋げることで「他者＝異なる存在、異なるアイデアとのゆるやかなつながりの中から新しい解釈（表現）を創造すること」をコンセプトとした。

ワークショップ実践では、曲を鑑賞し、個人でそのイメージを紙に表現していった。この時、ハートや星などの具体性の強いものは避けるよう指示することで、イメージを抽象化した。そして複数人に分かれたチームの中でそのイメージを共有した。時間制限を設けて、受講生が順番に一筆ずつ紙にイメージを表現した。

外所はこれを振り返って「音楽と美術は芸術としてまとめられることが多いが、あまり関連性を感じる機会が少なかった。しかし、今回のワークショップを通じて音楽と美術の融合がコミュニケーションや他者理解のツールとして史実の中で行われていたことを追体



図10 ワークショップで制作した絵画

験するということができた。しかし、どうしても他者の表現した形や色に影響を受けすぎてしまう様子が見られたため、音楽のイメージをさらに深めていきたい」としている。(高木)

4. 講座のデザインと評価方法

4-1. 講座の目的

Cコースでは、広瀬川と美術館でかつて展開されていた「ラボンヌ」や「生活造形実験室」のイメージを引き継ぎながら、受講生と共に「まえばし未来アトリエ」として再生することを目的としている。新しい「まえばし未来アトリエ」をどのような場にしたいかを考えたとき、キーワードとして挙がったのがアートによる「インクルーシブ」である。それは社会的・文化的マジョリティとマイノリティを巻き込む人・巻き込まれる人といった構造化された関係性を示すことではなく、双方のコミュニティが歩み寄り、アートで出会う／出会いなおすことで創出される「第三のコミュニティ」としてとらえようとするものである。すなわち、アートで出会う／出会いなおすことが仕掛けられた場づくりをどのように実現できるのかを考えることを通して、地域社会でひと・ものをつなぐ結束点となるような人材を育成しようというのが、本講座の趣旨である。したがって、受講生や講座に関わる講師、アーティストらが共に、子どもや高齢者、障害者など文化的・社会的マイノリティとされる人たちが多様なアートと出会いながら、「まえばし未来アトリエ」という場に新たな意味や価値を創造していく過程を講座としてデザインするに至った。

本項では、主にCコースの実践講座(図11の4つのプログラムの網掛け部分)のデザインについてまとめていく。(手塚)

4-2. プログラムと実践講座の方法

Cコースでは、当初より①ワークショップ、②展覧会、③カフェ、④研究会の4つの事業(プログラム)が設定されていた。また、講座開講期間中に3本の展覧会を開催することが決定していたため、週末に開講

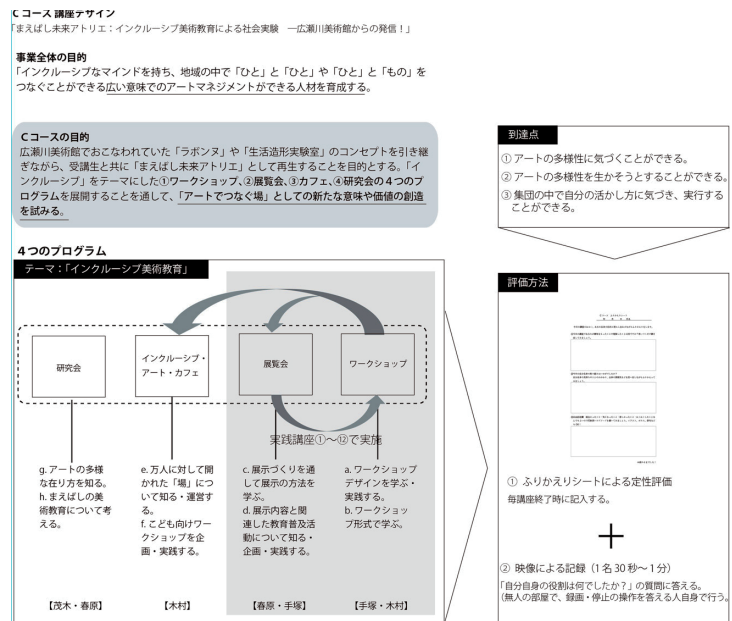


図11 実践講座C コースの講座デザイン

する実践講座では、①ワークショップと、②展覧会に絞って構成している。

講座の前半(実践講座①～⑧)は、「ゆさぶり期」(この講座自体が大きなゆさぶりを掛けてはいるが……)として「多様なアートの在り方」に気づくことをねらいに、「自分(わたし)」を出発点とした「アートとは何か?」の探求ができるようにした。実践講座①～⑦では、各展覧会を軸に大きく、1) 広瀬川美術館(展覧会) / ワークショップやイベントへのアクセシビリティについて考える、2) 多様なアートの在り方に気づき理解する、3) 学校の中と外の美術(アート)について自覚し考える、4) 展示づくりを学ぶ、の4点についてワークショップ形式で学べるように活動をデザインした。これら内容は、いずれも図11のa.～d.で示される項目(コンテンツ)に位置づけられるが、それぞれの項目が単独で取り組まれているのではなく、相互に関連しながら、4つの内容を構成している。また、実践講座⑧の中間まとめでは前半の講座のふり返りを実施し、後半へのイントロダクションとした。

講座の後半(実践講座⑨～⑫)は、「アートから遠い場にいる人たちがアートでどのように巻き込むのか」をテーマに、老人福祉施設(地域包括支援センター)、障害児サークル、障害者施設でアーティストによるワークショップを展開していく。受講生らはファシリテータとして参加し、そこで起きる出来事に立ち会う

ことを通して、アートという方法の特徴、多様性、可能性についての学びを深めていく。最終的に受講生は、2017年1月8日～22日に開催される「まえばし未来アトリエの学び展」で講座を通じた学びの成果を展示で発信する予定である。

本講座は大まかな流れとして、〈知る・自覚する・ゆさぶられる〉→〈身体／感覚的に知る・理解する〉→〈発信する〉という3つのフェーズで進行中である。
(手塚)

4-3. 受講生の変容とプログラム評価の方法

本講座が人材育成の一環として実施されることを踏まえて、様式が同じ「ふりかえりシート」を毎講座後に記入する方法で、①定性評価による受講生の変容、②①を活用したプログラム評価を実施することにした。併せて、③語りを通じた受講生の変容を把握することを目的に、実験的に映像による記録も実施している。プログラムの評価については、形成的評価を実施しており、柔軟に対応できるようにしている。尚、詳細は紙面の都合上、別の機会に譲るとする。(手塚)

5. 実践のふりかえり

5-1. 受講生によるふりかえり

実践講座⑧(10月9日)では中間まとめとして、5月から9月までの講座について、印象に残った3点を挙げてもらうことでふりかえりを実施した。以下、何人かの受講生のふりかえりを提示して、その学びについて読み取りたい。この場では、自分が経験してきた「アート」とは何だったのか、「アート」と「自由」はどのように関係するのかについて議論が交わされた。

- ・料理：パーティ当日、料理に徹したこと。パーティでは様々な催しがあったが、食でおもてなしをする部門のさらに奥の階層である、調理と片付けを行ったことが印象的だった。催しの表舞台に(はなやかさ)対して、ひたすら準備を整える裏舞台(地味)の人材は同じくらい必要だし、そこに携わることが出来て、改めて自分はそちらサイドの人間だと感じ取った瞬間だった。優雅に水面を泳ぐ白鳥の足の気分は思いのほか悪くないし、むしろ好き。
- ・デバイス：講師の方々が、様々なデバイス(機器)

を多用して、プレゼンテーション(情報提示と理解を得ること)し、メディア(記録媒体)に記録をしていく、という一連の作業が印象的だった。また、写真やビデオに撮り、SNS(人とのつながりを促進するネットサービス)へアップロードされることは、やはりこの年齢の私には抵抗感があるものなのだと気づきがあった(慣れているはずだったのに!)

- ・地域交流：講座に参加することで、みなさんとの交流がもてたこと。きっかけは仕事関係の縁だが、そこから地域交流にまで幅が広がったのは印象深い。きっかけを作ってくれた木村さんには感謝。またカオステーブルの時に友人と一緒にいったが、お客さんとして来てくれた友人と職場の社長さんが、幼少の頃に広瀬川美術館へ通っていた事実がわかり、衝撃に近い印象を残した。(受講生T)

- ・わたしのアートエデュケーション展
- ・とがび展・カオステーブル：自分について考えることが多かった。普段自分について考えることがほとんどない。→難しい、苦しい。
- ・とがび展・シンポジウム：美術教育の現状について考える。美術教育に対し、疑問を持ったことがなかった。→もっと考えるべき。←なんとなくやってこられた。与えられた課題をこなす。→楽、考えることが苦手。何も考えずなんとなく過ごしている、思い知らされる。(受講生Y)

- ・アートエデュケーション展の準備：久々の展覧会でワクワクした。協力して展示をつくる感覚。
- ・カオスギャラリーの制作：準備も含めて生徒と考えるのが楽しかった。一人で考えたり生徒と会議したり。
- ・他己紹介のワークショップ：相手をイメージして作るのは、やったことがなかったので新鮮でした。
(受講生F)

自己の「アート」の経験をふりかえることが、自分自身を深く考えることにつながっている。中学校の美術科授業において、教員からの表現の「押し付け」があり、特に自由なはずの美術においても、いわれたとおりにやれば教員からは怒られないことを知り、小学校では好きだった美術が嫌になったという経験を、「わ

たしのアートエデュケーション」に向けての準備で思い出したという受講生の発言は、美術における自由の意味を問い直しており、そのような問題提起がなされたことも本講座の持つ意味であったといえるだろう。

(春原)

5-2. 講師によるふりかえり

Cコース（に限らないかもしれないが）の特徴は、「講座」と銘打ってはいるものの、はじめに大まかな流れや内容を確定させた以降は、プロジェクトで起きる「こと」を受けて講師陣たちで対話を重ねることで今後の展開を変更していく柔軟性にある。プロジェクトの進行と共に講座のコンセプトを少しずつ変容させたり、プロジェクト自体の意義を問い続け、輪郭線を描き出そうとしたりするプロセスを受講生と共有することが、アートマネジメントの人材育成につながっているのではないかと考えている。実践講座⑧の中間ふりかえりでは、普段はワークシートにその日の学びを記述するという個人的な活動であるふりかえりを、受講生全員と対話で実施した。そこからは、「自分（わたし）」を出発点とした「アートとのかかわり」や「アートとは何か？」について、相互に深い理解が導きだされたように思う。後半後期に、受講生に向けてどのような「問い」を設定していくかを考えていきたい。

(手塚)

本講座の活動の一つとして、インクルーシブカフェ「kinäii」の運営がある。広瀬川美術館の一室にあり、子どもや大人、高齢者や障害者、どのような方でも過ごせる場所として、受講生と考えたワークショップを行ったり、展覧会を鑑賞に来られた方が休んで行かれたりする場として週1~2回程度運営している。来客は1日に1~15人程度である。

ワークショップに参加することが目的の来館者と受講生は、初めて出会った者同士でも、ワークショップの活動を通してコミュニケーションが円滑に行われている。また、「わたしのアートエデュケーション展」や「とがび展」など、アーツ前橋・群大連携の企画展への来館者も、全く知らない方や受講生など進んでコミュニケーションを図られる。企画展の内容や趣旨に共通の話題があり、興味・関心も非常に高いからであろう。

一方で、広瀬川美術館主催の企画展も多く、連携事業のことを知らずに来館される方も多い。その方々は、飲み物を飲むためだけに席に着かれる方もいる。この場合、一般の来館者は受講生や他の方とコミュニケーションをとる意識もなく、受講生も受講生同士でコミュニケーションをとり、知らない者同士の関係性は生じることがほとんどない。

無理にコミュニケーションをはかる必要はないが、極まれに、このような全く関係のない者同士で、作品の鑑賞がきっかけになりコミュニケーションが生まれることがある。予期しなかった出会いに、喜びを感じている方も少なくない。また、戦後からの歴史をつくってきた広瀬川美術館は、地域の方や市内・県内の芸術家の方など、町のこと、広瀬川美術館のこと、芸術作品などに非常に精通されている方も多く、人がつながる場にもなっている。

インクルーシブカフェとしての知名度は低く、美術館という敷居の高さはまだまだあるが、昔ながらの建物と、広すぎない空間の利用により、落ち着いた美術館、居場所として人々の集まる場所としての可能性があると感じられる。

さて、本講座の目的の一つにある、アートから遠い人をどのように巻き込むかということを思考し学ぶために、実践講座⑨として高齢者施設で出張ワークショップを実施した。この高齢者施設は、筆者が勤務する法人であり外部の団体が来るということに関して拒むことはなく、日程調整は柔軟に対応が可能であった。また、当法人は、同年のアーツ前橋の企画展「表現の森」で神楽太鼓の奏者1名とダンサー1名が4ヶ月にわたり合計8回来館されている。そのため、施設はアーティストが来るということに抵抗も少ない。ただし、慰問という形で琴やフラダンスのなどの他団体が来館されることもあるため、施設側はそのようなイメージでいることも多く、アートプロジェクトとして伝えることは非常に難しいことが挙げられる。

高齢者人口が増える一方で、高齢者に携わる若い世代が限られている。高齢者と携わりの少ない受講生にとって、どのようにコミュニケーションを始めるかが大きな課題となっていた。このような中、砂連尾氏のワークは握手をすることから始まった。握手と言っても、手の甲と甲、肘と肘、足の裏と裏など、体のどこで握手をするかで、高齢者の表情、言葉、仕草などそ

の方にしかない独特の表現を引き出す。そして、受講生を巻き込み、高齢者と受講生はフラットな関係へと導かれていった。



図12 実践講座⑨ 高齢者施設でのワークショップ

一度のワークショップだけでは、高齢者とのワークショップを体験しただけにすぎないかもしれない。しかし、ワークショップの後の、振り返りにより何を感じたか言語化し、お互いの気持ちや考えを共有していくことで学びは深まる。それは自身の内省だけではなく他者との交流へとつながっていく。

本講座の受講生は、美術教育学専攻の学部生や大学院生、教員、高齢者の通所介護施設に勤務する方など、年齢や専門分野が異なる。このような異なる視点を持つ受講生同士が感じたことを言語化することにより、幅広い視野への転換が行われていく。

国内で子どもの表現活動やワークショップは増えている。近年は障害者の表現活動も注目を浴びている。しかし今日の高齢化社会においても、アーティストによる高齢者に関する表現活動が非常に少ない。それは、まだまだアートが行き届かない場所が多くあり、アートを通じた「ひと」と「ひと」、「ひと」と「もの」がつながる可能性を持っているということである。高齢者だけでなく出張先の設定も検討しつつ、実施内容と振り返りを丁寧に行うことで、少しずつ今後の日本社会が変わる可能性があると感じている。(木村)

5-3. 美術館職員によるふりかえり

アーツ前橋は、開館前のイベントの時から、群馬大学の美術教育講座と連携した事業を数多く展開してきた。それらの多くはアーツ前橋が主催し、講演会やワークショップ、サポーター育成などの教育普及や、地域アートプロジェクトを運営していくうえで、大学がもつ美術教育の専門性を事業の企画や運営に活か

し、また学生にもプロジェクトのスタッフとして多く関わっていただいた²⁾。2015年度からは、群馬大学との連携事業として、アーティストと協働しながらアーツ前橋周辺地域で、大学生を含む受講生とともにアートプロジェクトを推進しながらアートマネジメントを学ぶ実践講座を実施している。

「まえばし未来アトリエ」の舞台となる広瀬川美術館とアーツ前橋のこれまでの関わりは、主に3つある。1つ目にアーツ前橋が開館する以前に平成23年度前橋市収蔵美術展コレクション+「つながる、つたえる」の会場の1つとして使用したこと。2つ目は、広瀬川美術館の前身である子どもアトリエ「ラボンヌ」を主宰した画家・近藤嘉男のリサーチを経て制作されたKOSUGEI-16の作品を、アーツ前橋の企画展「プレイヤーズ 遊びからはじまるアート」(2014年7月5日～9月15日)で当館の収蔵作品である近藤嘉男《作品A》と合わせて展示した。3つ目に「未来アトリエ」につながる活動の前段として、昨年度、アーティストの滝沢達史と中学生のアーティストユニット「うめばしパン」の作品を紹介する展示「ドーン こんなところに表現」を行った(2016年2月13日～24日)。ここで意図されたのは、「うんこ」をテーマにした中学生の作品や600万年前の哺乳類の糞石、石器、日用品を用いた作品など、美術館ではあまり紹介することがない「表現」を、国登録有形文化財である建築や内装、そしてラ・ボンヌの活動などの豊かなイメージをもつ広瀬川美術館で見せることによって、前橋の街中で多様な表現に触れる拠点の1つとして活用することだった。

アーツ前橋は今年度、福祉、教育、医療の施設や団体へアーティストと赴き、協働するプロジェクトを前橋市内で5つ始動させ、その序章を展覧会「表現の森協働としてのアート」(2016年7月22日～9月25日)として紹介した³⁾。その会期中に未来アトリエでは2つの展覧会が行われた。詳細は各執筆者の報告の通りだが、アーツ前橋の「表現の森展」と、未来アトリエの「わたしのアートエデュケーション展」と「とがび展」、いずれもチラシに互いの情報を掲載したことで、筆者が把握する範囲ではあるが来館者が2館を歩き来し、アートを通じて街の中に回遊性を生み出したようだった。各展覧会を通じて、美術の専門家だけではなく誰もがもつ「表現」や「協働」について考えるきっかけになったのではないだろうか。合わせて、教育や

福祉の関係者らと月1回行っている「まえばしアートスクール計画研究会」も重要な機会になっている。先進的な取り組みを行う外部講師を招いたトークを、県内のアート以外の現場の人と共に聴講し意見交換することで、アート、美術教育、福祉の役割や方法を問い直し、今後のビジョンを共有する会となっている。まだ試行錯誤の段階で、何か具体的な事業を実現するなどの目的が設定されているわけではないが、ここで培われたものがそれぞれの現場へ還元されていくことが期待される。

アーツ前橋の教育普及や地域アートプロジェクトを行う中で、中高生などのティーンやシニア層はイベントやプロジェクト単位での対象となることはあったが、回数も少なく定期的なプログラムを実施しているわけではない。当館は展示内容自体も現代美術を扱うことが多いため、特にシニア層は馴染みがなく敬遠している声も時折聞く。そうした状況の中で、未来アトリエがテーマとするインクルーシブな学びの場やカフェ「kinäii」のコーディネートをしている木村らの高齢者福祉の専門性や、段差や調光など施設や設備面での難点はあるが広瀬川美術館のレトロな内装を活かし、そうした対象者が前橋のシンボルである広瀬川を眺めながら日常的に気軽に活動できる拠点として徐々に認知されていくと良いのではないだろうか。未来アトリエでは、展覧会開催以外にもカフェ中でのワークショップや出張ワークショップを行っているが、現時点ではそれぞれの現場の中で完結していると感じている。未来アトリエで行っている事業は多岐にわたり、運営していくだけでも多くのマネジメントが必要で、参画する受講生も事業内容の大半が決まった中で、半分参加者として学んでいく形が多くなっている。今後は事業内容の精査と2館の人の行き来もプログラムに盛り込む可能性を探りたい。そして、今年度の活動で得た知見や受講生のニーズや専門性を活かし、受講生が本講座外で活動している日々の現場も本講座の活動場所となっていくと良いのかもしれない。地域を見渡しながらかつ全体が「アートスクール」となるよう、より群馬大学とアーツ前橋、そして受講生がお互いの専門性や関心を出し合い、それらがより一体となった連携と発信が課題であると考えている。

(小田)

5-4. 記録担当者としてのふりかえり

筆者はこれまで主に活動全体の記録と各講座のリフレクションムービー⁴⁾の作成という立場で関わってきた。本項では、その記録者としての立場から捉えた、現段階の成果とその要因について記していきたい。

本講座はこれまで、非常に内容の濃い活動を行ってきた。それぞれのリフレクションムービーを見ると、様々な学びや成果をみとることができる。しかし全てを取り上げることはできないため、ここでは講座内で行った中間発表会での、「アート」や「美術教育」についての語らいの場の様子から、筆者から見た現段階での本講座全体の成果と考えられるものを取り上げたい。

講座内で行われた中間発表では、それぞれの立場や経験をもとに「アート」や「美術教育」について多様な意見が出された。そこで受講生は、お互いの意見を否定するのではなく、それぞれの言葉に真剣に耳を傾け、意見を尊重し、刺激し合いながら各々が「アート」と「教育」とについて語っていた。ここでのやり取りは、筆者を含む受講生の「アート」や「美術教育」についての視野を広げ、考えを深めることに繋がったと考えられる。

受講生の「アート」や「美術教育」についての関わり方及びその深さはまちまちである。本講座開始時点では、興味はあってもあまり深く関わったことのない受講生もいたのではないかと考えられる。そのような受講生たちが、「アート」や「美術教育」についてそれぞれ語れるようになったのは、これまで本講座で実践してきた、展覧会を自らの手によって作り出す作業や、ゲスト講師によるレクチャーなどがあったからだと言えるであろう。このように受講生に展覧会を作るといった実体験を通して「アート」や「美術教育」との関わりを深めさせたこと、そこから各々が「アート」や「美術教育」についての考えをもち、それらを交流させて互いに視野を広げ、考えを深められたことが、現段階での1つの成果といえるであろう。

このような成果を産んだ大きな要因として、「対話」というキーワードが挙げられると考えている。各講座のリフレクションムービーを見てみると、本講座では、受講生と受講生、受講生と講師が話し合いをしている場面が多く出てくる。これまでの活動を振り返ってみると、期日の迫っていた未来アトリエオープニング

パーティを除けば、ここまでのメインの活動になった2回の展覧会は、講師と受講生とが一緒に対話を通して作り上げていったものであった。この対話が、受講生の年齢、性別、職業、またそれまでのアートや教育への関わり等が多岐に渡る本講座で、参加者の相互理解を生み、また自分たちが主体となって作り上げているという意識を生み出したのに大きく貢献しているといえるであろう。その結果、上記に記した中間発表でのそれぞれの立場をもとにした意見交換に繋がったと考えられる。

しかし、この「対話」はただなんとなく向かい合っただけで、話をしていれば上手くいくというものではないであろう。筆者が本講座の中で、これを活性化させたと考えている要因がある。それは、身体活動の存在である。第1回目の講座のリフレクションムービーを見ると、講座開始時は皆硬い表情で着席し講師からの内容説明を聞いている。しかし、ペアになって相互に相手に合わせたオブジェクト作りを始めると、受講生たちに笑顔が表れ初対面同士でも活発に会話がうまれているのがわかる。それ以外の講座でも、パーティの準備や展覧会の準備など、一緒に身体を動かすことで会話が生まれている様子、またその時の受講生の豊かな表情を見て取るができる。このことから、身体活動がきっかけとなり、それが積極的な対話を生み出すのに貢献したと考えられる。

ここまで筆者が考える現段階の本講座での成果の一部を紹介した。もちろんこれ以外にも、作品展を準備することで、キャプションの切り方や釘の打ち方など細かい技術的な部分を学んだことも成果であるし、「対話」による合意形成の進め方自体も、今後それぞれのフィールドでアートマネジメントを行なうことを期待される受講生にとって大切な学びと成果だといえる。

筆者が記録したリフレクションムービーはインターネット上で公開されている。このムービーの中で出会える講師と受講生たちの様子を見ていただければ、本講座の中で生まれた学びや成果の一端を垣間見てもらえるのではないかと考えている。(茂木克浩)

5-5. 事務局担当者としてのふりかえり

実践講座Cコースの特徴は、広瀬川美術館という私立施設を利用して展開され、受講生も一般参加者(受講生以外のワークショップ参加者や展示の来館者な

ど)も未就学児から70歳以上の高齢者まで幅広い年齢層で、異業種の人々が関わり合っていたことである。これは、広く一般市民に開かれた場であった。また、本講座を運営する上で他の実践講座と大きく違ったことが、2つ挙げられる。1つ目は講座の回数である。今年度の実践講座はほとんどが月に1~2回の講座開講日に、講師やゲストの話を踏まえて議論を重ねたり、ワークショップをしたり、フィールドワークをしたりといった活動内容が多い。それに比べこの実践講座Cコースでは、多いときには月に4~5回講座が開かれ、講座日以外にもそれぞれの受講生に課された課題に取り組むこともあった。事務局側も講師陣との情報共有がうまくいかず、内容や準備を理解することが難しいときもあり、対応が追いつかないこともあった。これは受講生にも言えることで、「良く分からないまま、進んでいってしまった」「次からは何をやっていくのか内容を理解していない」というような声も聞かれた。

このような状況は、2つ目に挙げられる内容の多様さに起因したのではないだろうか。まえばし未来アトリエでは、約6ヶ月の間にオープニングパーティやワークショップ、「わたしのアートエデュケーション展」や「とがび展」、また展示に伴ったシンポジウム等、さまざまな活動を展開してきた。これらは講座を充実させたと同時に、計画されたスケジュールに沿って、受講生が消化していったという印象もある。受講生は思考する時間もなく、次々にミッションを達成しなくてはならない状況に追い込まれていた時期も見受けられた。受講者数が実践講座の4コースの中で1番多いことにも関係していると言えるだろう。さらに、記録の重要性や取り方を学ぶために設定した集中講座への参加者も多くはなかった。それぞれの内容自体は、おもしろい試みのものが多く充実していただけない、受講生の参加が少なかったことはとても残念だと感じた。コンスタントに参加していた受講生は、展示するために必要なノウハウを身につけたり、多種多様なゲストの話を聞いて見聞を広めたり、今までの自分を振り返ったりすることができていた。受講生からも「職場関係者ではない人と関わることで、自分の中の凝り固まった考えがほぐれる」という自分自身を見つめ返し、他者から刺激を受けていることが分かる。

本講座の課題としては、より幅広い層の人たちが交

われる場を提供し、講座数のバランスを調整すること、最初に受講生と議論をする時間を確保して、受講生の自主性を引き出せる活動を実現することではないだろうか。今年度は、小さな枠組み内で自分の企画を練って実践する機会があったが、展示の内容自体を企画立案するといったこともできれば、まえばし未来アトリエはさらに発展できるのではないだろうか。それが受講生のアートマネジメント能力の向上にも繋がるだろう。(宮川)

6. おわりに

本稿で検討してきたように、自己の省察から発せられたアートにまつわる問いが、他者に、そして社会にどのように作用していくのか、どのように働きかけることができるのか、課題を抱えつつ、充分ではなくても「まえばし未来アトリエ」において受講生の思考はこのように展開しつつあるのではないか。それは、社会においてアートが影響力をもって波及していくプロセスそのものにもつながる。このような態度を獲得した人材が地域に生活し、アートによって疑問を投げか

けて街を挑発し、日常を変えて周囲を元気づけていくことができれば、それは意義深いことではないだろうか。この講座がそのための一助になりえるように活動を継続していきたい。(春原)

附記

本稿は、文化庁による助成「平成28年度大学を活用した文化芸術推進事業 美術館と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成プログラムの構築と実施・評価」の成果に基づくものである。

註

- 1) 正式名称は「ラ・ボンヌ」であるが、本事業においては「ラボンヌ」と表記した。
- 2) これまでの取り組みについては、記録集「前橋市における美術館構想 プレイベントの記録」や「アーツ前橋 年報」を参照。
- 3) 表現の森展に関する情報は、アーツ前橋のウェブサイト (<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/>) を参照。
- 4) YouTubeで一般公開 (<https://www.youtube.com/user/AMkiroku/>)。

(すのはら ふみひろ・もぎ かずじ・てつか ちひろ・きむら ゆうこ・
おだ くみこ・みやかわ さおり・もぎ かつひろ・たかぎ ふきこ)